都留文科大学研究紀要　第67集（2008年３月）
THE TSURU UNIVERSITY REVIEW, No.67 (Mar. 2008)

反骨の教育家　評伝　長崎太郎 Ⅴ

A Critical Biography of NAGASAKI Taro (Part Ⅴ)

関口安義
SEKIGUCHI Yasuyoshi

七　教育界への転身

武蔵高等学校教授となる

一九二四（大正一三）年九月十二日、長崎太郎は四年半に及ぶ海外生活を終え、帰国する。身分は依然日本郵船の社員である。帰国早々、彼は教育界への転身のための運動に乗り出す。教育界での活躍は、長年の夢であった。すでに記したところだが、彼は一高時代から将来は教育の世界で働くことを考えていた。ただし、その前に活きた社会を知ることが大事と、日本郵船株式会社に入社したのである。

この彼の計画は、ほぼ達成されたとしてよいであろう。彼は社会がどういうものかを知った。また、日本郵船ニューヨーク支店に勤務中、アメリカ各地をめぐり、最後は一高時代からの親友恒藤恭と、ヨーロッパ諸国を歴訪した。特にイタリア旅行での収穫は大きかった。彼は就職先の日本郵船で出世しようとはまったく思わなかった。もともと彼には会社勤めは不向きでもあった。それゆえ、物を相手とした仕事よりも、人を相手とした教育に携わりたいという願いが、帰国と共に大きくふくらむ。

日本郵船勤務は、横浜支店時代を加えるとすでに七年半になる。彼は会社に未練はなかった。太郎は就職運動を真剣に考えはじめることとなる。まず彼の頭に浮かんだのは、和歌山高等商業学校（現、和歌山大学経済学部）である。子息の長崎陽吉氏の直話（じきわ）によれば、太郎の妻美和の叔父が同校で教鞭をとっていたのが縁ではなかったかとのことである。

和歌山高商は一九二二（大正一一）年十月、和歌山市関戸（現、西高松）に創立された新設の国立経済専門学校である。校長はスパル

タ教育で知られた岡本一郎であった。就職には履歴書（研究業績を含む）と面接が決め手となる世界である。長崎太郎の学歴・職歴は申し分ない。が、専門の研究業績と見なされものは少なく、教職経験もない。問題は面接だと考えた彼は、岡本校長の人柄を知っているという旧知の武蔵高等学校の教頭山本良吉を履歴書持参で訪ねる。書き方の工夫も相談するつもりであった。山本良吉は太郎が京都帝国大学在学中の学生監であったことは、すでに第二章でふれている。

長崎太郎のニューヨーク在勤中、山本良吉はその職場まで来てくれた。山本が旅先のニューヨーク滞在中に一週間も病気で寝込んだときは、太郎が介抱にも当たった仲であった。太郎の誠実さ、貴重な海外経験を知っている山本は、「君が教育界に出ようと言うのだったら、その履歴書はこちらに置いて行ってくれ」と言い、たまたま教員補充計画のあった武蔵高等学校への就職を強く勧めたのである。太郎は山本の勧めに従い、履歴書をそのまま置いて行き、旧制武蔵高等学校への就職が決まるのであった。大坪秀二編『旧制武蔵高等学校記録編年史 大正11年～昭和24年』（武蔵学園記念室、二〇〇三・一〇）の一九二五（大正一四）年の二月七日の項には、「歴史教師たるべき長崎太郎氏に対し、［近々］決済を受くべき見込みの旨通知す」とある。すると彼は歴史担当の教師として採用されたことになる。

旧制武蔵高等学校（現、武蔵大学）は、東武鉄道の経営者として知られる根津嘉一郎によって、東京府北豊島郡中新井村（現、東京都練馬区豊玉）に設立された旧制高校である。場所は武蔵野の面影を残した草原で、至る所に大けやきが雄姿を誇っていた。学内には小川（溜川）が流れる。近くには桜の名所で知られる千川上水の清流が見られた。最寄り駅は武蔵野鉄道（現、西武鉄道）の江古田駅である。

武蔵高等学校は、財団法人根津育英会を母胎として文部大臣に申請、一九二一（大正一〇）年十二月十二日に設立が認可された。翌一九二二（大正一一）年四月には、第一年度の入学式を仮校舎で行っている。初代校長は内務官僚だった一木喜徳郎、教頭は山本良吉であった。『武蔵五十年のあゆみ』（学園50周年史編集委員会、一九七二・五）によると、一木喜徳郎は「我国民の教育的欠陥は外国語に不鍛錬なことである。最新国際連盟規約の批准事務を掌った私は特にそれを痛感して現在の教育制度では到底『世界の日本人』を作ることは難しいと考へた。故に新設の私立高等学校の特色を其処に求めて力を尽したい」との考えをもち、語学重視の教育を打ち出していた。長崎太郎が当時珍しかった海外生活体験者で、語学に堪能だったことは、その就職には有利に働いた。

一九二二年四月十七日の入学式で、一木校長は武蔵高等学校の「三理想」（三大理想ともいう）について訓辞した。「三理想」とは、

一　東西文化融合のわが民族使命を遂行し得べき人物を造ること
二　世界に雄飛するにたへる人物を造ること
三　自ら調べ自ら考へる力を養ふこと

であった。この「三理想」は、今日の武蔵大学、新制武蔵高等学校・中学校にも引き継がれている。『武蔵七十年史』（学校法人 根津育英会、一九九三・六）によると、「三理想は山本教頭の発案になるが、一木校長と十分に相談された結果成文をえたもの」とある。長崎太郎の経歴は、この校風にふさわしいものがあった。海外生活体験・語学力・ヨーロッパ研修での数々の経験は、武蔵高等学校という新興の学校の掲げた「三理想」実現に合致していた。教頭山本良吉が長崎を直ちに採用したこともよく分かる。

校長一木喜徳郎は、一八六七（慶応三）年四月四日、静岡県小笠郡倉真村（現、掛川市）の生まれ。東京帝国大学の法科を卒業。内務省に入り、ドイツ留学後、東京帝国大学法科大学の教授を内務官僚のまま兼任、一九〇〇（明治三三）年九月には貴族院議員となっている。大正時代には法制局長官、文部大臣、内務大臣を歴任。一九一七（大正六）年八月には、臨時教育会議副議長となり、七年制高等学校案を含む教育制度改革案を答申、一九二一（大正一〇）年武蔵高等学校校長となり、理想実現のため尽力した。

旧制武蔵高等学校の修業年限は、尋常科四年、高等科三年の七年である。つまり日本で最初の七年制高等学校として話題をよんだ学校だ。一九一八（大正七）年の高等学校令で、高等学校の修学年限を従来の中学五年に続く三年から、高等科三年と尋常科四年の七年に定められたのを受けての誕生であった。小学校を卒業後尋常科で四年学ぶと、そのまま高校に入れ、大学に進学できることになる。当時難関だった高等学校の試験を受けずに大学に進学でき、さらには国際的な感覚を持つ自主性のある人材を養成するとあって、世間の注目を浴びたのである。各学年尋常科はA、Bの二組、高等科は文科、理科の二組の少数精鋭教育をモットーとした。教師陣は若手の大学出の優秀メンバーのほか、兼任講師として近くの一高や浦和高校（旧制）の教授も招いた。

山本良吉

長崎太郎が武蔵高等学校に就職したのは、開校四年目であり、学内は活気にあふれていた。七年制高等学校の完成に向かって進む武蔵高校は、上潮の時代であった。『武蔵高等学校一覧　大正十四年度』（武蔵高等学校編纂発行、一九二五・六）の「職員名簿」を見ると、教授欄に「法学士（京都帝国大学）長崎太郎」の名が見出せる。着任二か月ほどで講師から教授に昇格していることになる。日本史と西洋史と法制経済を担当し、図書課長や生徒課長を兼担する。

長崎太郎は新しい職場で、水を得た魚のような活躍をする。一高時代菊池寛の退学事件の始末に奔走したように、彼には生来面倒見のよいところがあった。後年彼は武蔵高校就任当時を回想し、「私は教育界における経験は皆無であったが、優秀な教授たちに伍して自由に意見を述べ、率先して働いた。日本史・西洋史を担当し、法制経済を講じ、生徒課長と図書課長とを兼ね、その上、組主任までやらされた。しかし、若いころでもあり、新しい仕事でもあったので、はりきって身を忘れて懸命に勤めた」（『佐々木惣一先生と私』）と記している。

武蔵高等学校時代の長崎太郎に大きな影響を与えたのは、教頭山本良吉である。山本には幸い上田久『山本良吉先生伝』（南窓社、一九九三・一）という伝記があり、彼の人と仕事を知ることができる。ただ山本の文章の引用は、……による省略が多いので、原文に当たって確かめる必要がある。右の伝記によると山本良吉は、一八七一（明治四）年十月十日、石川県の金沢市の生まれである。第四高等学校時代は西田幾多郎・鈴木大拙・藤岡作太郎らと同級であった。特に西田とは親しかった。校長柏田盛文の国家主義的教育に抵抗し、西田らと退学、のち東京帝国大学文科大学哲学選科に学ぶ。選科終了後、京都府立尋常中学校や静岡尋常中学校での教諭となり、静岡では寄宿舎舎監として敏腕を振るった。

静岡尋常中学校時代の教え子の一人に秋月致（いたる）がいる。秋月は静岡

中学校を卒業後、金沢の第四高等学校に進学、キリスト教を知り、伝道師になることを決意する。そして四高を中退、上京し、植村正久の指導の下、東京神学社に入学、卒業後市ヶ谷教会の牧師となった。すでに記したように、長崎太郎に洗礼を施したのが、この秋月致である。

山本は一九〇〇（明治三三）年四月一日付で京都府立第二中学校の教頭となった。静岡での実績が評価されたのである。『山本良吉先生伝』には、「京二中では俸給は五階級も上がり、教頭としては最高給で迎えられた」とある。

山本良吉は、きびしい態度で自己の理想の実現に励んだ。また、教師生活の傍ら盛んに文章を書いて『教育時論』などの雑誌に載せていたが、この前後から著書に結実しはじめた。『倫理学史』（富山房、一八九七・一二）『倫理学要義』（普及社、一八九八・九）、『実践倫理要義』（京都五車楼、一九〇〇・一二）、『実践倫理 礼法篇』一九〇一・九）などである。

一九〇八（明治四一）年六月二十日、山本良吉は京都帝国大学学生監に就く。長年の中等教育、特に京都府立二中での教育実績と倫理関係の業績が評価されたのである。一九〇九（明治四二）年九月からは、第三高等学校教授を兼任し、倫理学を担当した。京都大学学生監であった山本良吉を、後年同じ京大学生監（課長）になった長崎太郎は、次のように回想している。

私は大正二年、京都帝国大学寄宿舎が、今の近衛通に新しく移築せられ、新しい木の香がまだ建物の中に残って居た頃入舎を許され、其処ではじめて山本先生にお目にかゝつたのであります。それは今より二十七年前で、山本先生は其の時四十二歳、今の私より六つも年下の壮年であらせられたのであります。当時二十二歳の学生であった私の目に映じた先生と、その頃の先生とほゞ同年であつて、しかも現在同じ仕事に同じ場所であつて居る今の私の眼に映ずる学生監山本先生との間には、余程の差異があるのであります。（中略）

次に明治四十四年には、菊池総長が、帝国大学は綜合大学であって単独大学ではない。綜合大学の利益は各々専門の学生互に相交際し、談話嬉遊の間に於ても、諸方面の観察法を知得交換するにあると云はれて、学生集会所を新設し、之を学生の使用にあてられ、山本先生は之が利用につき種々工夫をめぐらし、御骨を折られる処がありました。此の頃になつて先生の御活動は著しく盛になつて来て居ります。（中略）

こゝに又大正四年の学友会誌に一法学士に『就職行』の一文を草せしめ、就職難、就職の心得等を学生に覚らしめた事は、先生が学生の前途に深い関心を持たれた証拠であります。当時先生は、住友其の他の関西実業界に善良なる学生を多数紹介せられ、社会と大学とをつなぐ重要なる役割を演ぜられました。今は京大学生課のやつて居る就職斡旋の如きも、山本先生の社会に得られた信用に基礎を置くものと云ひ得るでありませう。大学には学生の性行簿と申すものがありますが、先生は学生に面会する毎に、驚くべき観察力を働かせ、其の学生の性行をこまかに御自身の手で帳簿に書き入れられてあります。それによつて先生は学生を諸方に御推薦になつたものであります。

（「祝辞」『校友会誌』第43号、一九四〇・一二）

山本良吉は京大学生監、三高倫理学の教授という多忙な生活の中で、『中学修身教科書巻一―五』（光風館、一九〇九・一〇）、『発動主義の教育』（弘道館、一九一三・一〇）、『大正女子修身書巻一～四上級用』（弘道館、一九一四・一〇）などを刊行している。山本は、物書きとしては晁水の号をもつ。

一九一八（大正七）年、山本良吉は学習院長北条時敬に招かれ、学習院教授となる。一九二〇（大正九）年には、「欧米に於ける学生生活状況調査」のため、ヨーロッパ各国をめぐり、ニューヨークで長崎の世話になったことは先に記した。一年間の外遊の成果は、『我が民族の理想』（弘道館、一九二一・一二）に見られる。帰国後、武蔵高等学校の創設に参画したのである。ヨーロッパ諸国をめぐって、彼の地の教育事情を視察したことは、武蔵高校創設に際して、いかに役だったことであろうか。先に記した武蔵高校の三理想も、山本の長年の教育体験と洋行の成果だったのである。

山本は寝食を忘れて、草創期の武蔵高等学校のために働いた。一九二六（大正一五）年には、一木喜徳郎の宮内大臣就任による辞任に伴い、山川健次郎を二代校長に迎え、山川が老衰のため一九三一（昭和六）年に退職すると、教頭兼校長として武蔵高等学校のために尽くした。山本の武蔵高校第三代校長に正式就任するのは、一九三六（昭和一一）年のことである。山本の中等教育への関心は高く、指導力も抜群であった。長崎太郎は後年「山本先生」（『晁水先生の追憶』故山本先生記念事業会、一九五二・三）で、「先生のご見識と熱意と実行力とは感嘆の外なかつた。先生は書物も広く読まれた。文章もお達者で、なかなか練って書かれた。英語も書き、且つ話された。書も謡もすぐれておられた」と記している。

山本良吉は、一九四二（昭和一七）年七月十二日、狭心症のため急逝する。満七十一歳であった。その二十三回忌に述べた長崎太郎の「追悼の辞」が、「元武蔵高校教職員代表」のタイトルで『晁水先生遺稿続編』（川崎明編、一九六一・二）に載っている。山本をよく理解した長崎太郎の、自身と山本良吉を語る貴重な文献なので、以下に長くなるが全文を引用する。

本日、山本先生の二十三回忌に、私が、この年で出席させていただくことは、私の予期しなかったことであります。私は、山本先生のなくなられたお年と同じで、今年七十二歳になりますが、こんな年まで生きようとは思ったことはありませんでした。

私は、青年時代に、会社生活をやめまして教育界に転じましたが、武蔵高等学校の教授として、ここに働かせていただくことになりましてから後の私の道は、山本先生によって自然に定めていただいたように思えます。

先生は、武蔵で、あの三大理想を、学校の理想として掲げられて、その目標に向かって、子弟を教育し、渾身（こんしん）の力を尽して、その実現に向って努力をせられ、ご自身には、また、教育家としての独自の信念をもって、七十二の御生涯を貫かれたのであります。

先生は、理想をもった特異な教育者でありましたが、また、その理想を実現する実際処理の行政手腕をもっておられたように存じます。理想家であると同時に優（すぐ）れた事務的才幹の持ち主でありました。これは、まことに珍らしいことであると思います。

今日、日本の社会、すなわち政治・経済・実業界・教育界・学会その他の諸方面に、優れた人材が、先生の門下から輩出しておることは、まことに偉観であります。それらの武蔵卒業生諸君が、先生の遺徳を偲んで、この年忌を営まれましたことは、まことに、美わしいことで、喜びに堪えません。

先生は、心から、日本の伝統を重んぜられましたが、他面、進歩的なところがありました。もちろん、他人の意見をよく聞かれましたが、どちらかと申せば、独自の考えを立てられ、これと信ずるところを、あくまで主張し、これを実行に移して行かれたのであります。

先生は、教授たちと対談しては、しばしば爆発をなされました。先生の御意向にかなわぬ者は、たとい、先生が自ら選んで採用をされた者でありましても、終に袂を分かたざるを得ないようなこともあったように記憶します。

生徒に対しましては、いやしくも、先生の教育理念に反しましたときには、その場において、直ちに、これに対して、こらしめの鞭を加えられたのであります。

しかしながら、二十三年の歳月を経ました今日、先生の厳しい鞭の痛みを、心にもち続けておる卒業生は、誰もいないだろうと思います。理想をめざして進む教育者が己自身のことを忘れて打つ鞭には、痛みはないはずであります。

佐藤一斎先生の言葉に「大功を為す者は衆に計らず」という語がありますが、武蔵での山本先生には、まさに、その概がありました。しかし、昔の武蔵高等学校は、それでもって、あのようにりっぱにでき上ったといっても、過言ではあるまいと思います。

先生は、ご自分の手で、厳しく教職員を選び、厳しい入学試験で生徒を選び、三大理想を掲げて、先生の教育理想を貫かれたのであります。時代もよく、周囲もよく、先生は、まことに幸福な教育者であられたと、私は、今も、思う次第であります。

こんなユニークな教育者であった先生に、武蔵で四年間使っていただき、その実際教育の場において、事に処して、教えを受けましたことは、私の終生忘れることのできぬ感謝でありまして、これが、今日、私が、先生の愛弟子の営む先生の二十三回忌に、土佐の隠棲の居から出てまいりまして、この会に連らせていただいたわけであります。

今日、この時代において、皆さんは、先生の考えておられたことと、全く同一の考えをもって進むことはできないといたしましても、先生が、あの時代に処して、堂々と、進歩的な独自の理想を堅持して、この光輝ある学校を運営して行かれた後を継いで、願わくば、徒に、古を回顧するばかりでなく、往年の盛んな意気に甦って、皆さんの若い力を終結して、その手によって、あの高邁な理想を高くかかげつつ、時代の先頭に立ち、先生のこよなく愛せられたこの学校から、いよいよ、優秀な人材を輩出させていただきますように、私は、心から念願いたしまして、今日ここにお招きを受けたお礼に代えたいと存じます。

武蔵高校讃歌の作詞

長崎太郎は山本教頭の下、旧制武蔵高等学校で有能な教員として働いた。授業ばかりか他の雑務にも、彼は労を惜しまず精励した。

大坪秀二編『旧制武蔵高等学校記録編年史』（武蔵学園記念室、二〇〇三・一〇）に、その記録を見出すことができる。

武蔵高等学校時代の長崎太郎の活躍の一つに、「武蔵高等学校讃歌」の作詞があげられる。次のようなものだ。

武蔵高等学校讃歌　　長崎　太郎 作詞
田中規矩士 作曲

一、青空わたる天津日（あまつひ）は　歩みとゞめてたゝへけり
若き命のすこやかに　御国（みくに）の為に生（お）ひ行く園よ

二、庭面（にはも）にそゝる大欅（けやき）　千代の髪振り語りけり
野辺に勝歌（かちうた）うたひてし　武士児（ますらをのこ）は健（たけ）くもありき

三、千種（ちぐさ）をわけて行く小川　緤（もつ）れとけつゝうたひけり
武蔵大野（おほぬ）のはてはあれ　学びの水はとこしへならめ

歌詞は武蔵高校関係書物によって若干語句に違いがあるが、右がスタンダードのものだ。現在は難しい漢字は仮名に置き換えられ、仮名は現代表記に変更されて、現代っ子にも親しめるものとなっている。先の『武蔵五十年のあゆみ』（横書き）には、「昭和3年4月15日　七年制高等学校としての完成をみ、また施設もほぼ完成したので、開校式を挙行した。この時初めて讃歌（作詞教授長崎太郎、作曲講師田中規矩士）斉唱が行われた」とある。また、『武蔵七十年史』（学校法人 根津育英会、一九九三・六）には、「讃歌は昭和3年に制定され、その年4月の開校式に発表された。それまで毎年校歌の募集を行っていたがふさわしいものがなく、この歌によって本校の讃歌（校歌）とされた」とある。

作詞後八十年近い今日でも、長崎太郎の武蔵讃歌「青空わたる」は、武蔵中学校・高等学校の入学式や卒業式で歌われている。歌詞はやや古びた感もなきにしもあらずだが、学びの水は永遠であってほしいとの願いを込めた詩は、田中規矩士の作曲のよさとあいまって、この学園に集まり散じた人々の心に生き続けている。

『武蔵高等学校同窓会報』第四号（一九六二・一〇）に、長崎太郎の「讃歌の由来」という一文が見出せる。それによると「青空わたる」の詩は、一九二七（昭和二）年当時の校長山川健次郎への病気見舞状の端に、慰安の意味で武蔵高等学校讃歌として書きつけたものだという。学校は創設の意気に燃えた時代であった。「青空わたる」の歌には、そういう新興の機運が満ちている。もともと文学が好きで、一高は英文科を志望する第一部乙類に所属していた彼には、作歌の心得があった。後年、彼は同級の友、土屋文明を師として短歌に励み、『山青集』（比叡書房、一九五五・一二）という歌集すら編んでいる。長崎太郎は、これが校歌になるとも知らず、即興の中に仕上げたのであった。当時武蔵高校には校歌がなかった。山川校長は長崎の歌を見て感心し、教頭の山本良吉に「これを歌ってはどうか」と示した。山本もよかろうということで、音楽担任の田中規矩士に作曲を依頼したという。

長崎太郎は一九二九（昭和四）年一月までの約四年間、武蔵高等学校に教授として在任した。学校には西巣鴨新田七〇三番地の家から通っている。在職中の一九二七（昭和二）年七月二十四日に、旧

友芥川龍之介の死に遭遇した。彼は同月二十七日の午後、谷中斎場で行われた葬儀に列席し、翌日恒藤恭とともに日暮里の火葬場に行き、遺骨を壺に拾う。九月号の各誌は、芥川追悼記事一色であった。彼は京都の恒藤恭に宛て、「色々の雑誌に芥川君の事が出てゐるのをよみました。高等学校を出てからは　文通もなく　会う機会も無かつたので、色々の人達の追悼の記事を読み乍ら　最近の芥川君の事を偲びました。／然し　人間と人間との霊は、終に　或る隔たりを越ゆる事の出来ないものである事、人は常に独りで住んでゐる者である事、を　しみじみ感じます。／同学の友人より優れたものを持ち、それを守つてゐた芥川君の　あゝした死を悼む心が頻りに起こります」（一九二七・八・二九付）と書き送る。

京都大学学生主事に

一九二八（昭和三）年の秋、長崎太郎は京都帝国大学法学部長山田正三の訪問を突然に受ける。京大の学生主事就任の依頼であった。まったく突然の話であり、武蔵高等学校での仕事が楽しくなっていた彼には、気持ちの動こうはずもなく、即座に断っている。武蔵高校は一期生が高等科の三年生になり、次の年三月に卒業という時期を迎えていた。彼らの卒業も見ずして武蔵を去ることはできなかった。が、その後も山田部長や当時京大法学部の教授となっていた恒藤恭の熱心な勧めは続き、この年十月十日には、恩師佐々木惣一から受諾を要請するようにとの親展電報が届く。

彼は恒藤恭に事情を聞いた。それによると、京大の七学部長会議で、多数の候補者の中から彼が第一候補として推薦されているのだという。十月十一日付の長崎太郎宛恒藤恭書簡があり、長崎の『佐々木惣一先生と私』（私家版、一九七〇・六）に収録されている。そこで恒藤は、「君が母校の為めに犠牲的精神を以て承諾してくれる事を僕個人としては御願する」とし、友人として考えても、「法学部の人々は一致して君を支持するにちがひないから君としてはよほど心強いと思ふ」と言い、さらに「君が将来教育家として何か独自の仕事をしたいといふ考を今もやはり持ち続けてゐるのであったならば、大学の書記官とか事務官とかいふ地位にあつたといふ経歴は余程役に立つと思ふ」と書いている。

学生主事とは文部省によって各大学の学生課に新設されたポストであり、学生運動取締の目的が多分にあった。京都大学では後述する河上肇事件の後、多数の学生が弾圧されたにがい体験があり、新設の学生主事の人事には、学生に同情と理解をもつ人を欲していたのである。長崎太郎の識見やリベラルな精神が買われたと言えようか。

が、長崎太郎は容易に承諾せず、この年の十二月十五日、京都に出向き、法学部の有志に招聘を正式に断った。ところが翌日の早朝、佐々木惣一が突如羽織袴で太郎の宿を訪れ、就任を懇願する。その趣旨は、「昭和二年の河上肇博士の事件の後に多数の学生が弾圧された京大では、有為な学生のためにいますこし同情と理解とをもつ学生主事がほしい」ということであった。恩師佐々木惣一の熱意と意気に動かされて、彼は遂に京大学生主事就任を引き受けることとなる。佐々木のやや大時代的熱誠が、長崎太郎を動かしたというべきか。

後年『佐々木惣一先生と私』の中で長崎太郎は、「私が安住しようと思っていた武蔵高等学校を辞して京大の学生主事になったのは、

佐々木先生の青年学徒に対する熱烈な愛情と旺んな母校愛とに動かされ、さらに先生の意気に感じた結果にほかならない。私自身はそのころ、母校京大に対しては先生のような愛校心をもってはいなかったので、先生が京大、ことにその法学部に寄せられる情熱にふれて、驚きかつうたれたのである」と記している。

一九二九（昭和四）年一月二十六日、長崎太郎は京都帝国大学学生主事（高等官六等）の辞令をもらい、京大学生課に就任した。学生課には四人の学生主事がおり、その末席に座り、思想問題の係りを受け持った。かつて社会問題に思い悩みながら卒業した彼が、いま思想善導官という立場で再び母校に戻ったのである。共産主義青年運動の勃興期、難しい時代であった。前年三月十五日には共産党への大弾圧があり、長崎の一高時代の友で共産党員の佐野文夫が、検挙投獄されたことはすでに記した。小林多喜二の小説「一九二八年三月一五日」（『戦旗』一九二八・一一～一二）で知られた弾圧事件である。

京大も河上事件で揺れた。三月十五日の弾圧で検挙された人の中には、京都大学をはじめ、各大学の社会科学研究会メンバーも含まれていたことから、文部省の左翼教授追放策が浮上し、いわゆる魔女狩りがはじまったのである。『京都大学百年史　部局史編』（財団法人京都大学後援会、一九九七・九）は、河上事件を次のようにまとめている。

> 最初の男子普通選挙が実施されて一カ月も経ない昭和三（一九二八）年三月十五日、日本共産党への大弾圧が行われた（三・一五事件）。この中には京大をはじめ各大学の社会科学研究会の会員も多数含まれていたことから、文部省では学生の処分、「左傾」教授の進退、社会科学研究会の解散を四月十二日に省議決定し、総長らに方針の徹底を図った。それから二週間、全国の大学で「左傾」教授の追放と社会科学研究会解散の嵐が吹き荒れ、東京帝大の大森義太郎、九州帝大の向坂逸郎らとともに、本学の河上肇が四月十八日付で大学を辞するに至った。また、同日には京大社会科学研究会も、総長命令により解散を余儀なくされた。
>
> 世にいう「河上事件」は、当時、ファシズム化への歩みを速めていた政府・文部省による本格的な大学・思想統制の一端であった。それは同時に、京大および経済学部にとっても、大学・教授会自治の真価が問われるべき重大な試練であった。

河上肇は四月二十一日、「大学を辞するに臨みて」の一文を書いている。そこには彼が京都に来たのは、「専心学問の研究に従事したいといふのが、当時私の熱望であつたのである」とあり、「経済学の自由なる科学的研究は、様々な敵に出逢はずには居られない」ともあり、さらに「俗念のため自分の学説を少しでも左右することがあつてはならぬ」というようなことばも見られる。河上は「良心に恥づるところなきは、自ら満足するところである」と書き、京大を去った。河上事件は、次に来る京大事件の予兆でもあった。

長崎太郎が赴任して間もなく、新聞部事件が起こる。それは教官と全学生によって組織された自治団体である学友会の一組織である新聞部の委員の多数が、社会科学研究会のメンバーで占められ、新聞が左傾したのをきっかけに、学友会を担当していた学生主事が左

翼学生を排除し、新聞部を壊滅状況にしたことから生じた。新聞部部長の佐々木惣一は部長を辞任する。怒った学生は法学部の大講義室を占拠し、集会を開き、総長室と学生課にデモをかけ、なだれこんだのである。騒動をきっかけに、左翼学生を一括処分し、学内から放逐すべしの意見が出はじめる。

就任早々の長崎太郎の仕事は、この事件の収拾にあった。彼は懲戒委員会において、進歩的な学生をかばうことに専心し、思想問題は問わず、寛大に処分するという原案を提出し、法学部の委員の助け船を借りて、どうにかこの案を通している。彼は「徒に懲罰の如き方法によりて本件の如き事態に臨まんとする事あらば、事の本末を誤り、教育の本旨に副はざるの恐れある」とか、「一時的外見的騒擾の状態を嫌悪することにより、不知不識の間に学生の真実の自治的精神の育成を阻止する事は、最も本大学教育に於て忌むべき処なり」との見解で会議に臨んだのであった。この事件処理をめぐって、長崎は左翼フラクションの名をつけられ、思想係りをやめさせられ、福利・厚生の仕事に回せられてしまう。意に反した左遷ながら、長崎太郎には幸運であった。以来彼は学生課にあって、学資・寄宿舎・保健・就職・文化講演などに力を注ぐこととなる。

当時全国の大学中、寄宿舎を持っていたのは、京都大学だけであった。彼は寄宿舎での学生の自治訓練に力を入れた。それは山本良吉の感化であったかも知れない。また、学生の就職の世話に骨折ったり、文化講演など学生の福利厚生面の仕事を開拓し、それに専念した。一方、彼は終始左翼学生の理解につとめた。そのことで、彼は学生の記憶に残った。第二次世界大戦後の一九六一（昭和三六）年十月、新聞事件当時の昭和初期のマルクス・ボーイらの親睦団体京大白川会は、長崎を銀座オリンピアに招き、歓待した。三十年ぶりの再会であり、話がはずんだという。オールド・リベラリスト長崎太郎の面目躍如たるエピソードである。

京都大学の学生主事時代の長崎太郎の精神的支柱は、言うまでもなく恩師佐々木惣一であった。そもそも長崎太郎が武蔵高等学校教授の職をなげうち、京都大学に学生主事として来たのも、佐々木惣一の学問はもとより、その人間的魅力にひかれてのことであった。佐々木惣一は、長崎太郎のいごっそう的な誠実な一本気の正義感を認めていた。さらには若き日のキリスト教体験やアメリカ生活で培われたヒューマニズムの側面をも高く買っていた。親友恒藤恭の勧めにもなかなか動かなかった彼が、佐々木の訪問によって京大行きを決心したのは、自分を深く認めてくれる恩師の眼を感じたからなのである。だからこそ彼は、それに応える働きをしようとしたのであった。

瀧川事件

やがて京都大学では、史上に名高い学問の自由、大学の自治をめぐる滝川事件（京大事件）が起きる。一九三三（昭和八）年のことである。わたしは別著『恒藤恭とその時代』（日本エディタースクール出版部、二〇〇二・五）で、かなり詳しく「京大事件」に関して書き込んだ。そこで別著を参照していただきたいのだが、概略は記しておこう。事件は前年十月に法学部教授滝川幸辰が中央大学で行った講演、「トルストイの『復活』に現れた刑罰思想」がマルクス主義的だとし、右翼団体の攻撃を受けたのにはじまる。

瀧川問題は国会でもとりあげられ、貴族院の菊池武夫と衆議院の

宮沢裕が瀧川の著書『刑法読本』（大畑書店、一九三一・六）を危険思想であると攻撃した。『刑法読本』は、前年の一月から三月まで、瀧川が大阪放送局から放送した公民常識講座の刑法のテキストを基礎に、補筆して刊行したものであった。内務省はこうした動きを受けて、一九三三年四月十日、瀧川の『刑法読本』と京大法学部の講義の教材としてまとめられ、全国の大学でテキストに用いられていた『刑法講義』（弘文堂書房、一九二八・六）の二著を発売禁止処分にした。

文部省では左翼教授一掃の機会とばかりに調査に乗り出す。四月二十二日の『大阪毎日新聞』（夕刊）は、「著書『刑法読本』の発禁から、帝大の赤化教授問題については、今春議会で鳩山文相も「断然処分する」と言明したが、さきに河上肇博士を出した京大に、またもや瀧川幸辰教授が問題となり、文部当局では同教授の著書を調査の結果、断然処分することとなり、小西京大総長の上京によつて退職手続きをとるはずである。勅任二等教授であるため面倒な手続きを要するが、当局では詰め腹を切らせた上、さらに同校の左翼教授一掃を企ててゐる」と報じている。

こうして小西重直京大総長は文部省に呼ばれ、善処を求められる。時の文部大臣は第二次世界大戦後総理大臣になった鳩山一郎であり、強硬姿勢で解決を図ろうとした。これに対して京大法学部教授団は、結束して抗争の姿勢を示し、五月十二日に非公式の会合を開き、文部省が罷免を発令できるか検討する。翌十三日の『大阪毎日新聞』の報道によれば、「懲戒委員会にかけるといふ説があるが懲罰事犯がないからさういふことはあり得ぬ、分限委員会にかける場合には京大官制第二条但書に「総長は高等官の進退に関しては文部大臣に具状し……」により総長の具状を要し、その総長は、大正三年一月二十三日、時の奥田文相が「教授の任免については総長が職権の運営上教授会と協定するは差し支へなく、かつ妥当なり」と意思表示をなしたことがその後文部省と大学との間に認められて不文律になつてをり、独自の意思を具状することが出来ない、かゝる制度を文部省が蹂躙することはすなはち大学の自治を破壊することになるから左様なことは文部省はすまい、従つて罷免の発令を行ふとは思はれぬが、もし発令したら勅令違反（京大官制）でそれは無効である」との見解に達したという。

京都大学法学部は、佐々木惣一を中心とした自由と進歩を誇る学部であった。それゆえ文部大臣の不当な大学自治への干渉に結束して立ち上がることになる。学部長は宮本英雄であった。宮本は六高から京大に学び、学生時代に起きた沢柳事件の際には、学生代表として上京し、文部省に奥田文相を訪ねたという経歴の持ち主である。彼は法学部教授会の先頭に立って研究・学問の自由のために闘うことになる。が、鳩山一郎文相はあくまで弾圧的態度をくずさなかった。

五月十五日、法学部の佐々木惣一・宮本英雄ら教授十五名は、辞職申し合わ状に署名している。「連袂辞職申し合わせ状」が残っている。恒藤恭もその一人であった。翌五月十六日、法学部教授会は「研究の自由」で声明を発表する。五月十九日には法学部学生大会も開かれ、教授会支持の声明を出す。二十日の『大阪毎日新聞』は、「京大未曾有の緊張が全園を蔽ふに至つた」と報じている。同紙によると、ここに来て小西総長も滝川教授処分反対を表明、法学部は文部省の高圧的態度に総辞職を賭して闘うことを決定したと伝える。

一方、鳩山文相の「瀧川教授問題についてはどんなことがあつても、決して文部省では譲歩するようなことはない」と語ったとの談話を載せている。鳩山の強硬姿勢の背後には、斎藤実首相の後押しというようなこともあったようだ。五月二十四日上京した小西総長は、永田町の文相官邸に赴き、鳩山文相に「学問研究の自由の立場から、瀧川教授休職処分を上申することは出来ない」と申し出た。その結果、瀧川教授の処分は、文官分限委員会に付されることになった。五月二十四日、法学部では総辞職をもって文部省と闘うために、宮本学部長のもとに教授十六名、助教授八名、講師十名・助手四名、副手二名、計四十通辞表がまとまり、翌日二十五日には学生一六〇〇名の退学届が学生委員の手にまとまった。

瀧川教授休職に関する文官高等分限委員会は、二十五日午後首相官邸で開かれ、満場一致で休職処分は可決されている。理由は「瀧川教授の根本思想はマルクス主義を多分に取り入れており、刑法各論の内乱罪、姦通罪などに関し刑罰否定的立場をとつており、わが国の家族制度ならびに公けの秩序を害することはなはだしい」というものであった。滝川教授の休職処分が正式に閣議で決定されると、二十六日、小西総長は辞意を表明する。法学部も宮本法学部長が全員の辞表を提出した。

京大事件は小西総長の辞任、松井元興理学部教授が総長になるに及んで、最終段階を迎える。後任総長選挙は七月六日に行われ、松井が法学部の佐々木惣一を大差で破り、当選した。この時点で京大法学部の敗退は決定したとも見なされる。文部省では松井の総長就任を機会に、法学部の強硬派と目される佐々木惣一・宮本英雄（法学部長）・森口繁治・宮本英脩・末川博、それに休職扱いだった瀧川幸辰の六教授の辞表を受理し、他の九教授（当時の京大法学部の教授スタッフは、全員で十六名であったが、紛争最中の六月末に井上直三郎が死亡、十五名となる）に対しては、慰留して辞表の撤回を求めることになる。松井総長は最終的解決案を「瀧川処分先例とせぬ」、今回は非常特別の場合で、教授の進退は従来通り教授会の決議により総長の具申を待って行うということで文部省と折衝したのである。

松井総長の解決案が出ると、残留教授、助教授の足並みは乱れはじめる。いわゆる「京都学派」の自由精神は、きびしい時代の嵐の中で揺れ動く。まず助教授は以後各人の自由意思によって行動することを決め、九教授は松井総長と会見の後、多くは総長の解決案は、法学部の主張を認め、文部省の譲歩を引き出しているとして留任の意向を示したが、恒藤恭と田村徳治の二人は辞表を撤回しなかった。

事件で助教授は七人中五人が辞任、留任は二人、講師・助手は一人を残し八名が辞任した。京大法学部は残留七教授を中心に（のち宮本英脩が復帰し、八教授となる）、夏休み中に体制を整え、九月から規定通り何とか開講にこぎつけている。

後年恒藤恭は、「私の信条」（『世界』一九五一・三）で、「京大事件の当時、私は「死して生きる途」という一文を雑誌『改造』に発表したものである。それを執筆したときには相当に突きつめた気もちで書いたのであって、「死して生きる」というような題目を、おこがましくもえらんだのであったが、―死して生きる途をたどるというようなことは、言い易くして、真に実行することは極めて困難であり、過去をかえりみて甚だ忸怩（じくじ）たる感じを禁じ得ない」と回想する。ここにはその後の戦時下の自身の体験が意識されているわけだが、京大事件に象徴的に見られた時代の波に抗して歩むには、当事

者としてこうしたことばを用いざるを得なかったのである。

京大事件に際して、長崎太郎は学生主事として、総長・教授・学生の三者の間にあって、微妙な立場に置かれていた。法学部教授会を援助しようとする激しい学生運動を、単に左翼的な動きとだけ見て、これを弾圧しようとする一部教授と同僚の学生主事との中にあって、彼は恩師佐々木惣一をはじめとする法学部教授会の立場を是認していたからである。

『佐々木惣一先生と私』によると、事件が高潮にに達して、学外の右翼団が佐々木惣一の身辺に危害を加える恐れがあると噂されたときは、法学部の学生に事情をうちあけ、佐々木家にひそませ、暴力に備えたことさえあったという。また、次のような文章も見受けられる。

事件が始まったころ、私は先生からの電話でお宅に伺った。その夜、二階応接室の空気は異常に重かった。先生は総長ならびに文部省との交渉のいきさつをつぶさに述べられ、「このたびは、この事情で私はどうしてもやめねばならぬ。」といいきって、しばらくの沈黙の後、やがて右手をあげ、「宮本（英雄）、末川、恒藤、田村、瀧川、森口君もやめるであろう。」と指を折られた。先生の顔に悲痛の影が濃かった。先生が深く心にかけておられたのは、御自身のことではなく、六人の若い教授たちの前途のことであった。

佐々木が翌年三月、辞職した教授をひきつれ、立命館大学総長に就任するに及んで、長崎太郎は学内で支持者を失うことになる。もともと彼が京大に呼ばれたのは、学生を理解する主事の必要をリベラルな法学部教授たちが要請していたからであった。が、彼らが京大を去ってからは、異分子扱いされ、仕事がしにくくなったのも当然のことであった。一九三五（昭和一〇）年十一月には、押し止められたが、松井総長に辞表を提出することさえあった。

八　美術教育者として

東洋美術への眼

一九三五（昭和一〇）年前後の長崎太郎は、京都帝国大学学生課のきびしい職場の中で、窒息するような思いで日々を送っていた。右に記したように、一時は辞職も覚悟した。不愉快な事件が続く。しかし、やがて理学部内の不正事件をきっかけに全学の「粛学」（長崎太郎の造語という）が進む。この事件に関して長崎太郎は、「昭和十一年七月、かねて懇意にしていた松山基範教授が理学部長となり、理学部内の会計の紊乱に気づき、その処理に困ったあげく、私のところに相談に来た。理学部の書記が図書費や機械器具費の伝票を押えこみ、理学部の借金が数万円に達していることがわかったのである。私は松山部長に、この会計の紊乱を糾弾して行けば、京大本部の腐敗に波及し、やがては本部改革に及ばねばならぬことを説明し、松山部長の重大決意を促すとともに、京大七学部からそれぞれ二名あての硬骨教授を選んで、理学部長の相談相手となって援助してもらうこととした」（『佐々木惣一先生と私』）と書いている。

一九三七（昭和一二）年六月、文学部の浜田耕作が総長に選任さ

れ、「粛学」を進め、検事局の手入れもあって、本部改革は進んだ。横領詐欺の名で検挙起訴された者も出た。多くの課長は辞め、学生課長には天野貞祐が就任、彼はその下で働くことになる。付言すると後年長崎太郎は旧制山口高校校長として、山口大学創設責任者としての任を終えると、右の松山基範を山口大学の学長として迎え、自身は京都市立美術専門学校の校長に赴任している。

前後するが、一九三六（昭和一一）年六月、長崎は吉田神楽岡の家から新築された京大官舎に入居した。彼はすでに五人の子の父であった。映吉・泉吉・桂吉・陽吉、それに文子の四男一女の子福者になっていたのである。新居は環境にも広さにも恵まれた家であった。彼は転居の感想を「新居の庭」（『京都帝国大学　寄宿舎誌』第三号、一九三六・一二・二五）という文章に書きつけている。「垣の外の篁（たかむら）が自然に根を張つて、庭の西南の隅の方に若竹が数竿生えて」いるこの家は、長崎にとって申し分ない家であった。

京都に住むようになってから、長崎太郎は日本画や陶磁器に関心を示すようになる。故郷土佐の安芸町（現、安芸市）は、陶芸の盛んな町であった。また、若き日、ニューヨーク滞在中には、多くの美術館めぐりをし、西洋美術鑑賞の眼を養った彼は、ここにきて東洋の美術にも特別の愛着を抱くのであった。

「陶磁器の鑑賞」（『京都帝国大学新聞』一九三六・二・六）という一文は、長崎太郎の陶磁器によせる理解の並々ならぬことを語るものだ。ここで彼は、「鑑賞には第一に観る人の天分、第二にその人の一般的教養、第三に陶磁器鑑賞のための特別の教養研究が考へられなければならぬ」と言う。さらに「陶磁器の鑑賞とは、分かり易く云へば、陶格に接して、これと語り合い、その美を楽しむこと、に外ならぬ」とし、さらに次のように書く。

> なお、陶磁器の鑑賞には、絵や彫刻と異なつて、見てよいと云ふ以外に、用いてよいと云ふ要素をも付け加へて考へねばならぬ。即ち、視覚の外に、触覚にもうつたへることになる。手にとつて、その器の用に従ふ適当の重さであるとか、唇に触れる感であるとか云ふことも鑑賞の範囲に入つてくる。大体に於いて、気品があり、安定で、静かで、純な感、或ひは健全な感を与へるもので、しかも夫々の用に従つて用ひてよいものであれば、まずよいものと云つて然るべきであらう。いはゆるひねくれたもの、妙に奇怪なもの、いたずらに珍妙なものを以てよいものとするが如きは、たまたま観る人の悪趣味を表白するものではあるまいか。

わかりやすく真っ当な陶磁器鑑賞論であるとしてよいだろう。後年、京都市立美術大学（現、京都市立芸術大学）学長として敏腕を振い、辻晉堂・近藤悠三・加守田章二・和太守卑良らの人材を集め、また育てた長崎太郎の美術教育者としての面が早くも輝いている。

いま一つこの時期の長崎太郎の陶磁器趣味を示す文章を紹介しよう。「古清水」（『洛味』一九三八・三・五）と題したものである。一部を引用しておく。

> 古清水とは、仁清以後の徳川期の所産であつて、その作品の趣致の上から明らかに一つの集団をなしてゐる陶器を呼ぶのである。

京娘の肌のやうな細かい胎土、うるんだ地釉、洗練せられた優しい形などは、どうしてもそれが京に生れたものであることをうなづかせる。胎土の関係から、それらの陶器は概して脆い。

古清水に向かつてゐると、ちやうど京女に対してゐるやうで、しつとりした、もの静かな雰囲気に包まれる。彼らの顔は上品ではあるが、生き生きして表情に乏しく、やゝ冷たい感をさへ与へる。それは、どんよりした地釉の上に施された色釉が、緑・紺青・金を主として（朱を加へることもあるが）冷たい色彩が多いからでもあらう。

その絵つけは、支那・朝鮮など異国からの影響を受けておらず、大和絵・土佐絵のくづれたものゝやうであり、模様は都人士の服装より由来したものではないかと思はれるものが多い。これを、かの狩野派の絵に由来するであらうと思はれる九谷の絵つけと比較すれば、明らかに面白い対象をなすものである。

古清水は、これを明るい強い光線の中で眺めるよりは、ほの暗い日本座敷で、障子越しのやはらかい光のもとで、静かに観賞すべきものではあるまいか。それ程に彼らは女性的であり、内気に生れついてゐる。

これより少し前の『大阪時事新報』の「芸苑」欄や『陶業新報』にも、長崎太郎は帝展作品の陶磁器に関しての見解を述べていた。彼は根っからの美術好みであったといえよう。

京大在任中の長崎は、しばしば恩賜京都博物館（現、京都国立博物館）に通った。彼がはじめてこの博物館を見学に訪れたのは、京都大学に入学早々のころである。以後外国生活時代と武蔵高校に勤務していた時代を除くと、長崎太郎ほどしばしばここに通った者はいないと言われるほど、彼は入館料を払っては入館した。しまいには館の方で気を利かせて優待券を出してくれたほどだった。

美術館で彼をとらえたものの一つに、大徳寺の牧谿筆の「白衣観音」があった。水墨画の観音像である。彼の東洋画に対する眼を見開かせてくれたのは、この大徳寺の観音であった。それは後になると、宗教的対象ともなっていく。晩年の長崎太郎の未定稿原稿「白衣観音」では、そうした気持ちを吐露している。正しくは「観音猿鶴図」というこの東洋の名画は、彼の心に深く刻まれた。

長崎太郎の美術好みは尋常でなく、その鑑賞眼はプロ級であった。のち長崎が高岡高商に転任するに際して、当時の京都博物館長土居次義は、餞別の意味で絵を展示し、ガラス戸を開けて見せてくれたという。

参禅会と短歌

時代は緊迫感を増していた。そうした中で長崎太郎は、一九三九（昭和一四）年一月、京都帝国大学学生課長に昇格する。天野貞祐の後を継いでの就任であった。天野は『道理の感覚』（岩波書店、一九三七・七）で自由主義を主張し、軍隊の教練に批判を加えたことから、軍部の抗議に遇って辞任、長崎太郎は急遽その後を継いだのである。彼と同期の学生主事はすべて二年前の粛学で大学を去っていた。そこで羽田亨総長は、このいごっそうを心ならずも抜擢したのである。それが後にトラブルを生む。長崎は恩師佐々木惣一に相談すると。「やむをえないことだろう」ということで、引き受けたのであった。

日中戦争は拡大し、時局の波は全国の大学にも押し寄せていた。一九四〇（昭和一五）年秋には、学友会・校友会を報国会へと切り替えようとしていた。学生課長としての長崎太郎は、文部省からのそうした内容の押し付け通牒に接しても、そのまま同意するわけにはいかなかった。彼は学友会の存続を羽田亨学長に申し出、自らは文部省に出頭し、思想局長に会い、これまで学生の自治機関として発展してきたものをなくしては惜しいと説いた。大学に戻ると、総長は報国会にしないなら、せめて学友会の名はなんとかならないものかと彼に迫った。長崎太郎はそこでただちに「同学会」とすることを提案し、文部当局と交渉してこれを納得させている。いごっそう長崎太郎の面目躍如たるところである。しかし、こういうことから長崎太郎は、次第に総長と対立するようになる。以後、高岡高等商業学校校長として転出するまでが、長崎太郎にとってのいばらの道であった。

学生課長時代の長崎太郎で目をひくのは、真人会という学生のための参禅の会を、久松真一、立花大亀らと作ったことと、短歌をはじめたことである。参禅会に関しては、立花大亀に次のような回想がある。

私は、昭和十四年、京都帝国大学学生課の依頼で、同大学生のために、真人会と言う参禅会を作った。毎土曜の午後六時から九時まで座禅し、提唱も行った。指導は、私と文学部久松真一氏であった。世話をしたのは同学生課長長崎太郎さんであった。真人会はなかなか熱心に行われたが、段々戦争が苛烈になるに従うて、学徒出陣で、初め百人ほどのも一人去り、二人出て、十九年の末月頃はとうとう七八人になってしまったので、とうとう一時止めることにした。（「大亀禅話」第一一七話、一九六二・一二）

立花大亀は大徳寺派の塔頭（たっちゅう）徳善寺の住職で、後年大徳寺派の宗務総長を二期つとめている。交わりの広いことでも知られた宗教人であった。長崎太郎は、このころ仏教に理解を示すようになっていた。参禅会は学生のために作ったものとはいえ、学生課長として困難な仕事に携わっていた彼には、精神を統一して仕事に当たる点でも意味があったのであろう。立花とは戦後もずっと交わりが続いた。

一九四〇（昭和一五）年、学生課長の激職の中で、長崎太郎は作歌を始める。ニューヨーク時代の上司であり、一高、京大の先輩にも当たる勝山勝司の勧めに従ったのである。勝山は長崎に、歌の師には土屋文明を選べと勧めた。後年長崎太郎は、歌を始めた動機と土屋文明のことを、歌集『山青集』（比叡書房、一九五五・一二・二五）の「後記」に、以下のように記している。

作歌を始めたのは、京都大学の学生主事時代で、中日事変が始まつて日々の仕事が愈々困難の度を加へて来た頃からである。その頃歌を作るのは、多忙な職務の中にあつた私の心慰めの一つであつた。歌稿を次々に先生（注、土屋文明）に送つて教を乞うたが、先生は仮名遣の末に至るまで丁寧に直し、懇切に添削批評しては送り返された。それが返つて来るのを待つて受取るのは、私の大きな楽しみであつた。忙しい先生が素人の貧弱な歌を根気よく御親切に見て下さつたことは、ただただ感謝のほ

かはない。それにもかかはらず、私の不勉強は歌を一と処に停滞せしめて進歩のあとを示してゐない。読返してみると、ただ折に触れて感謝を記録した程度にとどまる。結局、歌も命がけで励まねばものにならぬことがよくわかつた。

ここでは先生と呼んでいるが、土屋文明と長崎太郎とは一高で同級であった。もっとも土屋は一八九〇（明治二三）年九月十八日生まれなので、長崎より二つ年上であり、一高入学も土屋は一九〇九（明治四二）年で、一年先である。が、すでに述べたように、土屋は山本有三などとともに岩元禎のドイツ語の試験に失敗、原級どまりとなって翌年入学の長崎や芥川龍之介・久米正雄・菊池寛らと同級になったのである。

一高時代の長崎太郎は菊池寛や佐野文夫や井川恭に親しく、留年生であった土屋文明とは親しむ機会はなかった。土屋はそのころから歌をやっていたが、長崎には素朴な、ひとり自分の道を行く青年に映った。とにかく一高時代の土屋文明は、目立つことのない地味な学生であった。土屋にとって留年は、屈辱感に満ちたものであった。彼には無試験検定トップ合格の童顔の長崎太郎は、輝いて見えた。

留級の吾等に来りし優等生君に思ひきや生（よ）を終ふる交り

（『続々青南集』白玉書房、一　九七三・七所収）

この短歌は、後年土屋文明が長崎太郎の死を悼んで詠んだ歌の一つである。土屋は斎藤茂吉と並んで歌壇の大家になった。長崎太郎はかつて同級生であった土屋に、辞を低くして師事した。短歌の世界はそういうもので、師の権威は絶対であった。

一九三九（昭和一四）年、長崎は学生課主催の月曜講義に、万葉集に関する講義を取り上げた。阿部次郎・澤瀉久孝・花田大五郎・小畑忠亮（万葉集の英訳者）それに土屋文明である。当初は斎藤茂吉を予定していたのが、健康の都合でダメになり、代わりに土屋が入ったのである。この万葉講義で土屋は「旅人と憶良」という題目の講義を熱心に行い、のちその講義ノートをもとに『旅人と憶良』（創元社、一九四二・五）を刊行することになる。

長崎太郎の歌集『山青集』は、一九四〇（昭和一五）年から一九五四（昭和二九）年までの歌三百数十首が収められている。函付き、B6判二五四ページ、装幀は富本憲吉と佐藤辰三、活字の組も見事な美本である。中の一首「鞍馬山山の奥にて手作りし木芽煮少々君に送らむ」は、土屋文明に寄せたもの。一九四〇年以降の長崎太郎の歩みがこの一巻の歌集に顔を出す。歌を詠むことは、この時期から戦後にかけての長崎太郎の重要な仕事ともなっていく。作歌は勤務の不平不満をまぎらすためにも有効であった。彼は夜ふけの床の中で、心をしずめて歌を詠むのであった。

なお、長崎太郎には、土屋文明研究家の米田利昭の依頼によって書いた「土屋文明と私」（『高知アララギ』一九六四・七～九）の一文があり、後年の二人の密接な関係をうかがい知ることができる。